

願いをおこして仏法を修学することをいう「シクシャー（学）」について、『瑜伽師地論』卷第八十二、撰積分や『顕揚聖教論』卷第十三、撰浄義品は、「学」の総義としては戒定慧の三学をあげ、別義としては「勤精進して聖教の如く行ず、若しは習、若しは修とは名の差別なり。身語を清浄にし、正命現行するは是れ学の自性（自相）なり」と規定し、「学」の目指すものが聖教に随順した正しき生活法の確立にあると述べている。

ここにいう「正命」とは言うまでもなく四聖諦中の道諦、つまり苦滅をもたらす実践法として説かれる八正道の一つにあげられる正命のことである。『中阿含経』卷第七「分別聖諦経」によれば、「無理を求むるに非ず、多欲にして厭足なきを以てせず、種々の伎術呪説邪命をもて活くることを為さず、ただ法を以て衣を求めて非法を以てせず、また法を以て食床座を求めて非法を以てせず。これを正命と名づく」とある。ここにいう衣食床座を衣食住の三方面と捉えれば、仏法に随順した衣食住を通して正しき生活法確立していくところに、仏法を実践する意義が存在するということである。

恵心僧都源信述として伝わる『十心卑下集』には行者用心として八種の観想が説かれているが、その冒頭には「衣食住五観事」が置かれている。本稿では初めにインドや中国撰述仏典に個別的に散見する衣食住に関する教説をとりあげる。「衣」に関しては窺基の『金剛般若経賛述』卷上に説かれる事の三衣（僧伽梨、鬱多羅僧、安陀衣）と法の三衣（被甲精進衣、柔和忍辱衣、慚愧衣）のうち、特に心の防護に関する法の三衣の諸相をとりあげる。「食」に関しては『増一阿含経』卷第四十一に説かれる四種の人間食（段食、触食、意思食、識食）と五種の出人間食（禅食、願食、念食、解脱食、喜食）のうち、特に仏教食育論ともいうべき五食をとりあげる。「住」については多方面にわたるが、ここでは洗浴の施設に関して、『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷第十七が僧尼の居住する坊舎に彩画を許す事例を十四項目にわたってあげる中、浴室火堂には『天使経』に依る彩画が指示されていたこと、また瞻病堂には如来が自ら看病する像の彩画が指示されていたことをとりあげる。

続いて『華嚴経』浄行品が在家・出家の菩薩の身口意三業にわたる生活法を百四十偈を以て説く実践徳目を衣食住の三方面からとりあげる。凝然は『華嚴経品釋』において浄行品の題目を「萬行染を離れるを浄といい、千修路を奔るを行という」、主意を「即事而真の嵐、妄想の塵を拂う。託事顕法の光、無明の闇を照らす」と述べている。

衣食住にわたる日常生活の場が、仏法を顕し、妄想を転換して行く浄化の道場となりうるという理念をとりあげる。